

研究主題「文法事項の確実な定着により、 コミュニケーション能力を育成するための英語指導の工夫」

東京都教職員研修センター企画部企画課
御蔵島村立御蔵島中学校 教諭 芳賀 貴明

第1 研究のねらい

知識基盤社会化やグローバル化が進む現代の社会においては、知識や人材を巡る国際競争が加速する一方、異なる文化・文明との共存や国際協力が従前にも増して求められている。このような時代においては、外国語教育を充実し、子供たちにコミュニケーション能力を身に付けさせることが重要である。

しかし、中央教育審議会答申（平成20年1月）において、中学校外国語科における課題として、コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力が十分身に付いていないことや、授業が分からない生徒の割合が他の教科と比べて高い傾向が見られることが指摘されている。

同答申では、外国語科における学習指導要領改善の基本方針として、『聞くこと』、『話すこと』、『読むこと』及び『書くこと』の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る。また、コミュニケーションを内容的に充実したものとするができるよう、指導すべき語数を充実する。」と記している。また、東京都はコミュニケーション能力を育成する重点施策について、「東京都教育ビジョン（第2次）」（平成20年5月）において「国語科の学習で培った言語に関する能力を基本に、知的活動やコミュニケーションの基盤となる言語の役割を重視した各教科等における指導方法等の研究開発を行う。」ことを挙げている。

これらのことを踏まえ、中学校英語の授業で生徒のコミュニケーション能力を高めるため、言語活動を通して基本的な語彙や文法事項を活用する力を身に付けさせる授業を開発する。生徒同士の言語活動によって、文法事項を確実に定着させるため、協同学習を取り入れ、生徒に「分かる喜び」や「できる喜び」を実感させる。その結果、コミュニケーション能力を支える文法事項の確実な定着を図り、生徒の学習意欲を高め、自ら学び、課題を解決する生徒を育てることを本研究のねらいとした。

第2 研究の内容と方法

研究仮説		
<ul style="list-style-type: none"> 文法指導を言語活動と一体的に行う際に、生徒同士が学び合う協同学習活動を取り入れることで、生徒に文法事項を確実に定着させることができるであろう。 コミュニケーション能力を支える文法事項の確実な定着を図ることにより、生徒の学習意欲を高めることができるであろう。 		
基礎研究	調査研究	実践研究
<ul style="list-style-type: none"> 英語の授業における課題 コミュニケーション能力育成のための指導方針 協同学習の先行研究 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の意識調査 学習内容の定着度調査 協同学習を取り入れた英語指導上の留意点 	<ul style="list-style-type: none"> 文法事項の確実な定着により、コミュニケーション能力を育成するための英語指導の工夫 協同学習活動を取り入れた検証授業の実施 意識調査と定着度調査の分析
検証方法		
<ul style="list-style-type: none"> 学習した文法事項を用いて英語で作文する課題を実施し、学習内容の定着度を得点化する。 得点によって文法事項の定着度を検証し、得点の変化と意識調査の相関関係を分析する。 		

第3 研究の成果

1 基礎研究の結果と考察

言語活動を通して文法事項を定着させ、コミュニケーション能力を育成する指導を工夫するため、協同学習について先行研究を調査した。協同学習は、学習の過程で生徒間のやり取りや協力を重視する点で、本研究が求める英語指導の工夫に合致する。

一方で、協同学習における先行研究は、指導方法についての研究であるため、指導内容については、前述した中学校外国語科における課題に対応させる必要があると考えた。本研究では、言語材料である語彙や文法事項を学習する際に協同学習を取り入れ、これを図1のとおり協同学習活動として授業に位置付けた。

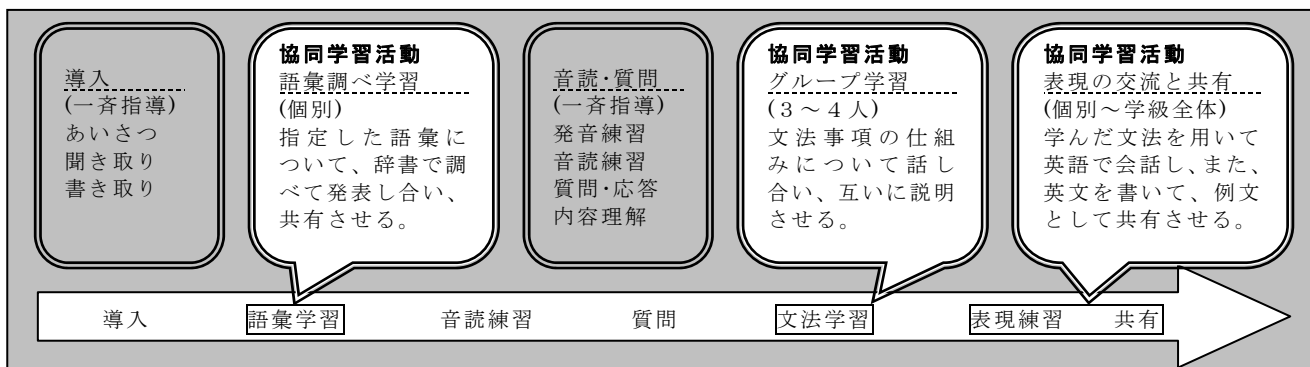


図1 協同学習活動を取り入れ、文法事項を確実に定着させる英語の授業

2 調査研究の結果と考察

英語の授業における課題と生徒の現状を明らかにするため、都内公立中学校1校において、調査研究を行った。全学年生徒を対象とした質問紙による意識調査と、直前の授業で学習した内容を用いて英文を書かせる課題（以下、英作文課題）を実施した。

意識調査では、授業が分からない生徒の割合が他の教科に対して高いという指摘を踏まえ、生徒がどのようなことから、英語の授業を理解していると実感するか、アンケートを実施した。その結果、「英語を正しく書く」ことや、「英語の問題の答え方や文法の仕組みなどが理解できる」ことから、理解したと実感しているということが明らかになった（図2）。

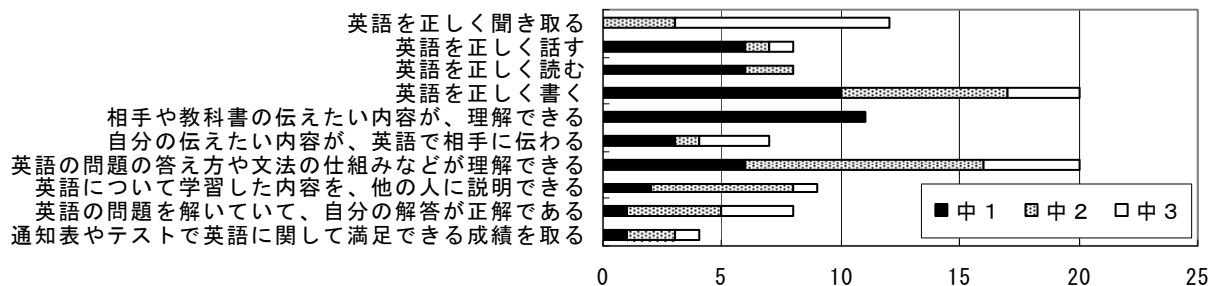


図2 どのようなことから英語の授業を理解していると実感するか（検証授業実施前）

また、「コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力が十分身に付いていない」という指摘を踏まえ、学習した内容の定着度を測るため、英作文課題を実施した。直前の単元で学習した内容を用いて3文以上書くよう指示して英文を書かせた結果、3文以上作文できた生徒は全体の22.2%で、直前の単元で学習した文法事項を活用して英文を書いた生徒は全体の11.1%だった。この結果から、全学年を通じて、学習した文法事項を用いて、まとまりのある一貫した英文を書くことができていないことが明らかになった。

3 実践研究の結果と考察

文法指導を言語活動と一体的に行う際に、協同学習活動を取り入れた英語の授業を開発し、その効果を検証するため、都内公立中学校1校で、全学年を対象とした検証授業を行った。

調査研究で示された課題に対し、協同学習活動を取り入れることで、生徒が授業中に分からないことを追及し、理解に結び付けるようにした。また、学習した文法事項を用いて英語で話したり、その内容を英語で書かせたりすることで、文構造等を確実に定着させるようにした。

検証授業後に意識調査と英作文課題を再度実施し、前回の調査結果と比較して、得点の変化と意識調査の相関関係を分析した。

検証授業実施後の英作文課題で、3文以上という条件を満たして作文できた生徒は全体の77.8%に、直前の単元で学習した文法事項を活用して英文を書いた生徒は88.9%に増加した。また、学習した内容を用いてまとまりのある一貫した英文を書くことができる生徒が増え、その結果、生徒全員の得点が向上した(図3)。

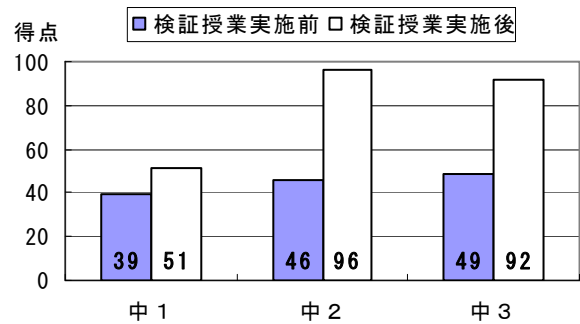


図3 英作文課題 得点の変化

英作文を分析すると、協同学習活動で友人と話し合った内容を書く生徒が増え、教科書の例文と全く同じ文を書く生徒がいなくなった。教科書を参考にして書いた場合でも、自分や友人を主語に書き直し、自らの体験や考えに基づいて、つながりのある文を書くことができた。身の回りの状況について書く際に、必要な語彙について質問したり、自ら調べたりしたため、文中で正しく書くことができた語彙数が増加した。

学年別に見ると、第2・3学年の生徒は得点が大きく向上した。検証授業実施前の意識調査によると、休み時間に級友と教室内でよく会話しているという学校生活の様子が明らかになった。一方、得点の向上が小さかった第1学年の生徒は、教室で会話することに関して消極的で、友人とは学校外で話すと答えた生徒が多かった。学級内の話しやすさによって、検証授業で協同学習活動に参加しやすくなり、その結果、学習内容の定着が図られたと考えられる。

全学年の中で得点の向上が顕著であった第2学年の生徒は、検証授業後に、授業で理解していると実感する判断基準について「話すこと」と「書くこと」を挙げる生徒が増加した。また、授業中に自分から発言したり、文で表現したりできることをより重要と考えるようになった。

生徒ごとに分析すると、得点の向上が大きかったのは、検証授業実施前の得点率が中間の生徒だった。これらの生徒は検証授業実施後の意識調査で、「英語の難しい問題を解く際に、話合いが有効な手段と思うか」という質問に、全員が「そう思う」と答えている。生徒が互いの説明を聞き合うことで、学習内容を理解する際に補完し合い、自信をもって英文を書いた結果、得点が向上したと考えられる。

得点が最も向上した生徒は、検証授業後に、「英語の問題を解いていて、自分の解答が正解である」ことより、「英語について学習した内容を、他の人に説明できる」ことで、より理解していることを実感するように意識が変化した。理解したことを他者から評価されることより、学習した内容を分かりやすく他者に説明できることを重要と考えている。検証授業によって、主体的に他者とコミュニケーションをとろうとする意欲を高めたと考えられる。

4 総括

カリキュラム開発研究では、検証授業を通して以下のような生徒の変容がみられた。

検証授業実施前の生徒の状況	検証授業実施後の生徒の状況
<ul style="list-style-type: none"> ○ 英語の問題の答え方や文法事項などを理解することに関心があるが、十分に理解できていない。 ○ 話し合いによる課題解決は有効な学習方法だと考えているが、授業で自分の意見や考えを相手に伝えることは好まない。 ○ 書くことによって理解していると実感するが、学習内容が定着しておらず、英語で正しく書いて表現することができない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習した語彙や文法事項などは、授業中に相手に説明したり、説明を聞いたりする過程で理解しようとするようになった。 ○ 相手に意見を伝えたり友人の意見や考えを聞いたりすることを、課題解決のために有効な手段と考え実践するようになった。 ○ 授業中の協同学習活動によって定着させた語彙や文法を用いて、英語で正しく書いて表現する力が向上した。

本研究では、生徒に文法事項を確実に定着させることをねらいとした。そのために、授業に協同学習活動を取り入れ、自分が理解した内容を、他の生徒に対して説明させた。検証授業実施前に行った意識調査によると、生徒は授業中に自分の意見や考えを相手に伝えることを好まなかったもので、次のように協同学習活動を段階的に行えるように工夫し、カリキュラムを開発した。

検証授業では、初めに語彙調べ学習を行い、調べた内容を発表させた。次に3、4人の小グループによる学習を行った。口頭で意見を発表することが苦手な生徒を想定し、文構造を理解させる際に、単語カードを用いて語順を操作させるなど、共同作業の過程で話し合いが活発になるよう促した。まとめとして、各授業で学習した内容を用いて自らの体験や考えを英語で話させ、英文を書かせた。最後に、完成した英文を題材に、互いに意見を述べたり、文の誤りを修正させたりして、学級全体で共有させた。まとめの表現活動とその共有を継続して行ったことにより、生徒は授業中の協同学習活動に参加することを重要と考えるようになり、話し合いは回を重ねるごとに活発になった。授業ごとに生徒が獲得した文法事項は、自ら考案した正しい例文として蓄積された。

文法事項を学習する際に協同学習活動を取り入れ、文法事項の確実な定着を図ったことにより、英作文課題において生徒全員の得点が向上した。生徒たちは検証授業を通して、相手に意見を伝えたり、友人の意見や考えを聞いたりすることを、難しい課題を解決するために有効な手段と考え、実践するようになった。生徒一人一人に「分かった」、「できた」と実感させることで、生徒は自信をもって自分の考えや意見を発表できるようになった。

第4 今後の課題

協同学習活動を継続して実施することで文法事項の定着度がさらに向上するか調査し、その効果について、今後も一層の検証を行っていく必要がある。

また、さらに工夫を重ねることで、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に向上させる協同学習活動へ発展させ、英語の授業に最適化した協同学習を研究し、コミュニケーション能力の向上における協同学習活動の効果を検証する。